

### 3 CMC術後30年の長期遠隔成績からみたMSの治療体系

菊地千鶴男・名村 理・三島 健人  
磯田 学・岡本 竹司・曾川 正和  
林 純一

新潟大学呼吸循環外科学分野

【目的】1980年代終末から経皮的僧帽弁交連切開術(PTMC)が盛んに行われるようになり、僧帽弁狭窄症(MS)の治療大系は大きな変遷を遂げた。一方で最終的には僧帽弁置換が選択される例も多い。過去に外科医が施行した閉鎖式僧帽弁交連切開術(CMC)は僧帽弁に対する効果という点でPTMCに近似している。CMC術後遠隔患者を検討しPTMC後患者の遠隔予後を予測した。

【対象】1970年4月より1979年4月までの10年間に当科で施行した拡張器を用いたCMC32症例のうち急性期死亡例を除き、2005年3月までに追跡調査が可能であった25人(男5例、女20例)を対象とした。このうち遠隔期に僧帽弁に対し何らかの再手術が行われた症例15例をR群、行われなかった10例をF群とし、各種検定を用いて2群の予後決定因子を検討した。

【結果】25例の手術時平均年齢は $33.5 \pm 8.1$ 歳。平均観察期間は $11399 \pm 933$ 日(31.2年)であった。累積再手術回避率は5年後100%、10年後84%、20年後72%、30年後39.3%であった。再手術となった15例はMSの増悪によるもの11例、MRの出現によるもの4例で、施行手術は単独MVR3例、MVR+TAP6例、MVR+CABG1例、MVR+AVR4例、OMC1例であった。R、Fの2群間で年齢、性別に有意差を認めなかった。術前の僧帽弁口面積はR群 $0.9 \pm 0.25$ 、F群 $0.88 \pm 0.64\text{cm}^2$ で有意差なし。術後の弁口面積はR群 $3.2 \pm 0.17$ 、F群 $3.1 \pm 0.13\text{cm}^2$ で有意差を認めなかった。Afの合併はR群9例、F群3例で有意差なし。Ⅲ度以上のTRの合併はR群11例、F群2例と有意( $p < 0.05$ )にR群で多かった。R群の15例のうち1例を脳梗塞で、1例を肺炎で失った。脳梗塞をはじめとする心源性eventをR群に4例、F群に1例認めた。

【考察・結論】CMC術後30年余の経過観察で

60%以上にMVRをはじめとする再手術を施行した。R群とF群では手術前後の僧帽弁口面積に有意差は無く、手術時所見から遠隔病態の予測は困難であった。再手術例の多くはTRの合併からAfを来たして心不全がコントロールできなくなったものと考えられ、血栓event合併例も多い傾向であった。PTMC術後の患者も同様な経過をたどる可能性があり、慎重なFollow upを要する。

### 4 感染性心内膜炎が起因したと思われる急性心筋梗塞、左室自由壁破裂、乳頭筋断裂の1例

天野 宏・金沢 宏・中澤 聡  
白石 修一・青木 賢治・高橋 善樹

新潟市民病院心臓血管外科

症例は60歳男性。数日前より悪寒、呼吸苦あり、ショックにて当院搬送された。心電図上急性心筋梗塞の診断、CAG#12 totalであった。また心エコー上心タンポナーデあり、左室自由壁破裂の診断にて手術となった。心尖部側壁のoozing typeの左室破裂の所見でありsuture less technicにてrepairしたが術中経食道エコーにて乳頭筋断裂によるMRの所見ありMVR施行した。前乳頭筋断裂と前尖に穿孔部あり、培養にて $\alpha$  Streptococcus 検出され感染性心内膜炎と診断した。術後経過良好であったが第20病日突然ショックとなり心エコー上心タンポナーデ、再手術となった。梗塞巣に破裂部を認めたため体外循環下に左室縫合術を行った。その後は経過良好にて第39病日独歩退院した。感染性心内膜炎が急性心筋梗塞を合併することは稀であり報告する。

### 特別講演 I

#### 慢性心不全の予後予測因子と治療効果

東北大学大学院循環器病態学分野

渡辺 淳

慢性心不全の二大死因は心不全死と突然死であり、両者を予防する治療法の開発が必要である。ある治療法が上記目的を達成できているか否かを